令和６年度　第２回学校運営協議会　議事録

実施日：２月７日（金）14:15～16:30

○　出席者

赤石真美 様（岩手日報社）、小田加代子 様（フリーアナウンサー）、本山敬佑 様（岩手大学）、吉田真雄 様（YOSHIDA LIFE）、水野洋子 様（通信制 FTA 会長）、千葉仁 様（同窓会長）、加藤源広 様（NPO 法人もりおかユースポート）、三浦隆 様（黒石野中学校長）、三田正巳（校長）、大槻英樹（定時制副校長）、砂沢剛（定時制副校長）、藤田早苗（通信制副校長）、他生徒９名

※ 欠席の委員（４名）：両方義人 様（NHK 盛岡放送局）、佐藤清一 様（定時制 PTA 会長）、中坪久人 様（株式会社ギャルドブレイン）、足利文香 様（フォトグラファー）

○　とりょんカフェ

担当：通信制生徒会（水野花梨、馬目玲奈、菅原心蒔）

１　開会行事

探究活動発表（定時制３年次 宮田颯、通信制 馬目玲奈）

２　校長あいさつ

令和６年度の生徒の活動成果の報告（生徒生活体験発表大会、とうほく T2 さみっと、オール杜陵高校生徒交流会 など）、100 周年関連事業について及び DX ハイスクールについて説明。また、各課程の取組を動画により委員に紹介した。

３　生徒発表

「これまでの自分と今の自分、杜陵高校で過ごして」というテーマで、中村誠一郎（定時制４年次）、宮田颯（定時制３年次）、水野花梨（通信制）の３名が発表した。

発表後に、奥州市在住の漫画家あおかえで先生に制作いただいた、水野花梨を主人公としたまんが「将来（みらい）への歩みをとめない」を紹介した。

○生徒発表（抜粋）

これまでの自分と今の自分、杜陵高校で過ごしてみて

皆さん、こんにちは。本日は「これまでの自分と今の自分、杜陵高校で過ごしてみて」というテーマでお話しさせていただきます。

私が杜陵高校に入学したのは、中学３年生のときに不登校気味になったことがきっかけでした。小学校時代の習い事での嫌な経験から、周囲に嫌われたくないという思いが強くなり、常に周りに合わせるようになりました。その結果、自分が本当にやりたいことや自分らしさを見失い、八方美人に立ち回るようになってしまいました。周りに合わせるために嘘を重ねてしまい、それがばれることへの恐怖から、次第に学校へ行くのが苦しくなりました。

そんな中で進学先を考えたとき、あまり人と関わりたくないという思いから、杜陵高校に進学することを決めました。

入学当初、私は周囲の生徒たちを、見た目から怖いと思っていました。しかし、生活体験発表を通じて、それぞれ困難な経験を乗り越えてきたことを知り、「こんなに強く、真正面から自分と向き合える人がいるのか」と衝撃を受けました。それをきっかけに、私も少しずつ自分自身と向き合うようになりました。

杜陵高校は、先生方が生徒の意見を尊重し、挑戦を支えてくれる環境が整っています。そのおかげで、私は少しずつ自分の気持ちを表現できるようになり、自分から挑戦するようになっていきまし

た。
　その中で、私はアルバイトを始めました。最初のうちは人間関係に悩み、特に厳しい先輩との衝突もありました。あきらめて、途中で投げ出したいと考えた時もありました。しかし、それと中学校で不登校になった自分を重ね合わせたとき、このまま逃げたら私はここから成長できないと感じました。それからは自ら積極的に話しかけ、考えをお互いに伝えあうことを大切にしながら、関係改善に努めました。その結果、厳しかった先輩とも信頼関係を築くことができ、最終的には励ましあえる仲になりました。この経験から、人間関係の本質は対話にあると学びました。
また、杜陵高校ではさまざまな挑戦の機会を与えてもらいました。顔認証プログラミング、小学校、視覚支援学校での出前授業、マイプロジェクトなど、貴重な経験をさせていただきました。さらに、「haruto プロジェクト」という私専用のグループまで作ってもらい、国有林でドローンを飛ばしたり、モーションキャプチャーを体験させてくれたり様々なことをさせてくれました。今月半ばには私の教職に対する理解をさらに深めるために、情報の専門教員の授業を参観する場を設けてもらっています。
　こうした経験を通じて、私は、周りとのつながりが心の成長を支え、新たな挑戦へと導くことを実感し、人間関係の大切さを学びました。また、人間関係をよりよくするのは八方美人に立ち回るのではなく、自分の意志をしっかり持ち、相手と向き合って考えを伝えあうことが必要だと気付きました。
　現在、私は高校の情報教員になることを目指しています。そのための第一歩として、私は 11 月の岩手県立大学の学校推薦型選抜に挑戦しました。そして、無事に合格することができました。次の目標は、大学で教育支援システムを作ることです。先生の負担を減らし、より多くの時間生徒と向き合えるようにすることで、先生がより生徒の心を支えられるようにしていきたいです。
杜陵高校での３年間は、私の価値観を大きく変えました。中学時代の私は、人と関わることを避け、自分を見失っていました。しかし、今の私は、自分らしさを認め、人とかかわりを持つことの大切さを知っています。
　これからも、夢に向かって一歩一歩進んでいきます。杜陵高校での経験は、私にとってかけがえのない財産です。本日は、ご清聴ありがとうございました。

4　委員と生徒による協議（グループワーク）
　テーマ：「杜陵高校で過ごしてみて」「今後がんばりたいこと」
　委員２名と生徒２名併せて４名のグループを４つ編成し、協議（40 分）を行い、各委員から所感を述べていただいた。
【各委員の所感】
（本山委員）
　本日の発表や懇談を通して、皆さんの存在が定時制通信制高校のイメージを大きく変えてくれていると感じた。増加する不登校の要因として、学校内で子供たちが承認される場所が少ないことが考えられる。子供たちが自分の意見を言い、自分の存在を認められる場が必要だ。杜陵高校では一人一人の学びや先生方との出会いが生徒をエンパワーメントしており、先生方の指導力に改めて感心した。とりょんカフェをはじめ、各種活動が学校の文化として根付いていくためには何ができるか、学校運営協議会の一員として考えたい。また本日ここに参加してくれた生徒以外の、まだもやもやしたものを抱えている生徒とざっくばらんに話をする機会をもちたい。

（小田委員）
　この学校を選んだ中村さん、この学校を選んだけれども最初ちょっと否定的で殻にこもっていた宮田さんの話を聞いた。ちょっとしたことがきっかけで「天の岩戸」が開き、参加してみたら何かいろいろ可能性が広がっていた、親友と呼べる友達に出会えた、という話が聞けた。本山先生がお話しした通り、この学校に入ったけれども殻にこもっている生徒がいたら、彼らの体験も聞き、ここには全力で応援してくれる先生方や仲間がいるよ、ということを知ってもらいたい。先生方にも引き続き、絶対に揺るがないサポートと開かれた高校であるように取組を続けていただきたい。
（吉田委員）
　生徒がちょっとしたきっかけでフックアップされる環境はそうはない。本日ここに出席している生徒は精鋭でまぶしく見える。すべての生徒がそうではないが、チャンスがあり、それをつかめる人がいるということは素晴らしいこと。この学校で経験したことは、５年、10 年後にすごいことをしたな、と思えるのではないか。
（赤石委員）
　この学校運営協議会は年２回だが、とても楽しみにしている。皆さんの発表や 16 歳、17 歳の生徒が自分のことを自分の言葉で表現できるということに感動した。皆さんと同様、ここにきている生徒たちはある意味、困難を自分で乗り越えてきた生徒だと思うが、そうではない生徒とも話す時間を作っていただけたらと思う。大人として「学校」が全てではないけれども、成長する一つの場として、良い機会に若い人たちが恵まれればいいなと、少しでもそのお手伝いができればいいな、と思っている。
（千葉委員）
　１年生の生徒と話をしてみて、「仲間づくりって何だろう」という問いに「ほどほどの距離感をもって」という答えが返ってきて驚いた。まさか高校生からそんな言葉が出るとは思ってもいなかった。三人とも生徒会に入っており、「定通混じっていろんな人の意見を聞いてみたい」と、話すときにこちらをちゃんと見て素直に話をしてくれたことが印象深い。きっとこの学校で身に付けたのだろうと思う。先は長いので、多少斜めから、距離感をもって見つめてもいいと思う。人は人、自分は自分と考えながら行くと、今後もこれから社会に出ても自分らしく生きていけると思う。
（水野委員）
　皆さんはいろんな理由でこの学校に来ていると思うので、卒業後もこういう落ち着ける場所がある社会をつくることが、我々大人が行うべき活動であると感じた。自分もこれから、日本の子供たちが楽しくなることを、日々社会のニュースやいろいろなものに触れて考え、活動していきたい。
（加藤委員）
　ニートや引きこもりの人たちの就労支援をしているが、そういう人たちはいろんな枠にとらわれて自由に生きていけず、苦しんでいる。社会の縛りもあるが、自分で自分を縛っているところもあるようで、息苦しそうだと思う。今の若者は大変そうだ。今日の話を聞いて、杜陵高校では先生方が生徒に自由な時間を与えつつ、チャレンジする機会を与えていると思う。次の世代にも継いでいってほしいし、先生も生徒さんも共にそういう空間を作っていってほしい。
（三浦委員）
　毎回勉強させてもらっている。全国的に不登校の生徒が増えているが、学校では周りに合わせなければと思って、どんどん苦しくなっていくのだろう。みんなで一緒に何かをしていくのが価値だという流れがあって、それが転換できないでいるのが「生きにくさ」になっている原因だと思う。他者とほどよい距離で、濃くない過ごしやすさから入っていき、このようなイベントに挑戦してそれが自分の自信になったり、自己肯定につながったりしている、というのが杜陵高校の魅力だと思う。安心できる場所を

準備してもらいながら、ちょっとチャレンジして一歩踏み出せる力になることをやっているのが杜陵高校だと思う。まだチャレンジに参加できていない人たちが参加できるしかけを作っていけたらいいと思う。これからも杜陵高校を応援している。

5　校長から

本日の会を通して、現在の学校の状況についてご理解いただけたようであれば幸いである。本日発表した生徒は素地がある生徒である。他の生徒の状況についても、教職員から情報収集をして note などで発信することを通して把握することができている。本日話題となった、このようなステージに上がれない生徒に対しても、様々なきっかけをつくる仕掛けは担任先生を通して行っているところである。本年度は月間校長賞として、部活動等で活躍できるような秀でた能力をもたない生徒にも光をあてるための取組も行っている。また、マスコミに対して、学校の各種イベントの情報提供も数多く行うなど「企業努力」をしている。

高校生活は生徒の人生を左右する大事な期間であると認識している。本会でも紹介した各種アンケートの結果は、昨年度と比較して明らかに良くなっており一つの成果として捉えている。ある学校医の方からは、全日制では集団に所属することで安心してしまい、自己理解できていない生徒が多いが、杜陵高校の生徒は自立して個性を発揮している、というお話をいただいたことがある。杜陵高校の魅力や杜陵高校でできることはたくさんあると考えており、引き続き委員の皆様のご支援・ご協力をいただきながらこの流れを継続していきたい。